

2011 年度 小委員会活動成果報告

(2012 年 2 月 14 日作成)

小委員会名	バリアフリーデザイン小委員会		主 査 名：岩田 三千子 就任年月：2009 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 環境設計運営委員会		委員長名：佐土原 聡 主 査 名：福田 展淳
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2013 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>感覚機能と建築空間との関係について、環境工学的なアプローチを深め、広く社会に啓発することを活動の目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2009 年度；4 回の委員会を開催して委員の研究内容についての情報交換を行うほか、研究協議会 1 回、見学会 1 回を企画運営する。 ・ 2010 年度；次年度を見据えて年 4 回の委員会を開催し、委員の研究内容についての情報交換を行うほか、見学会、公開研究会などを企画運営する。 ・ 2011 年度；年 4 回の委員会を開催し、福祉施設の環境に関するアンケート調査を行い、データを整理する。 ・ 2012 年度以降；年 4 回の委員会を開催し、福祉施設の環境に関するアンケート調査結果を分析し、その内容を踏まえてシンポジウムまたは研究会を企画して、様々な分野の研究者と意見交換する。 		
委員構成 (委員名 (所属))	<p>委員公募の有無： 無</p> <p>主査：岩田三千子 (摂南大学)、幹事：安部信行 (八戸工業大学)、委員：延原理恵 (京都教育大学)、土川忠浩 (兵庫県立大学)、土田義郎 (金沢工業大学)、村上泰浩 (崇城大学)、堀越哲美 (名古屋工業大学)、二井るり子 (奈良女子大学)</p>		
設置 WG (WG 名：目的)	なし		
2011 年度予算	185,000 円	<p>ホームページ公開の有無： 有</p> <p>委員会 HP アドレス：http://news-sv.ajj.or.jp/kankyo/s18/</p>	

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	

<p style="text-align: center;">目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 4回の小委員会を開催し、障害者、子ども、高齢者などを対象とした建築環境工学分野のバリアフリーデザインに関連する課題について、メンバー各自が異なる研究調査活動を行った。その結果、各メンバーよりそれらの成果について重要参考資料などが提出され継続的に情報交換を行うことができた。 2. 2011年度は関西周辺を中心として2件の見学会を実施した。1件は新築された神戸中央市民病院であり、ユニバーサルデザインの観点から建築計画、人間工学および建築環境工学的な内容についての検証WSを、設計者と共同企画した。建築学会関係者、学生、障害者、一般市民らが参加して、環境工学的な配慮への「気づき」について、少しずつではあるが啓発を実践できる機会となった。 3. 見学会の2件目として、5月に竣工したJR大阪駅の見学会を実施した。「ステーションシティー」という新たな建築、まちづくりの手法について、設計者、および施主、建築企画分野の専門家などの意見を聞く機会を得た。建築環境工学的な配慮については、企画設計段階で十分であるとは思えず、空間が出来た後に問題点を見つけることが多い。予測できるはずのこのような問題点については障害者や高齢者などに対する部分にとどまらないので、今後、建築計画分野との共同研究・企画・設計を行う機会を求める必要があることを再認識するとともに、今後の活動の方針と展開を見出すことができた。 4. 大阪府を中心として、福祉施設の住環境についてのアンケート調査を企画し、現在その回答を得て集計を行っている。このアンケート調査により障害者や高齢者、こどもなどを対象とした福祉住環境の構成要素を明らかにするとともに、環境工学分野の設計基準、評価基準の指標作成を目的とする新たな研究活動への第一歩を踏み出すことができ、非常に大きな成果が得られたと考えている。
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 昨今は本務先業務の多忙な委員が多く、ネットワーク拡大をねらって公開研究会等の企画実施することが難しく、日常的な意見交換も不十分になりがちである。 2. 環境工学分野の現場での問題点を明らかにする必要がある、福祉施設のアンケート調査を企画したが、現場の測定を同時に行って分析を加えるなど、今後の課題である。